

# 各分科会からの報告

## 地域支援とソーシャルワーク

「まちづくりの視点からはじめた地域生活支援」

一練馬区立豊玉障害者地域生活支援センター きらら園芸プログラムモデル「花くらぶ」の実践報告と今後の展望について一

練馬区社会福祉協議会 岩崎 貴子  
日本社会事業大学大学院前期1年 全 形文

### 1. はじめに

2007年緑の都市づくり推進本部「緑の東京10年プロジェクト<sup>1)</sup>」において、緑あふれる都市東京の実現が達成課題として掲げられた。そこでは都民・企業が主人公で展開する方針で福祉施設緑化事業が達成のための取り組みのひとつとして示された。地域社会の中で福祉施設利用者等に良好な環境を提供するため、苗木の世話を通じて施設利用者等の緑をはぐくむ心を醸成することが重要な視点として位置づけられている。練馬区は「福祉連携緑化事業」を東京都より受託している。また練馬区立障害者豊玉地域生活支援センターきらら(以下「きらら」という)は、地域活動支援センター事業である園芸プログラムモデル「花くらぶ」(以下「花くらぶ」という。)を行っていたが、2006年練馬区公園緑地課より障害者との緑化事業の協同企画を受けたことをきっかけに上記のプロジェクトに関わることとなった。「地域の安らぎや潤いになる、みどりの空間が増える、活動する方たちの生きがいになる、その結果、練馬に住んで楽しいまちになっていく…<sup>2)</sup>」ということを事業の目的に、2008年練馬区から運営がみどりの機構に

委託され、今日まで「きらら」と公園等の花壇を区民のボランティアと協働で行っている。

本研究では、2006年12月に策定した「10年後の東京<sup>3)</sup>」で掲げた目標「水と緑の回廊で包まれた、美しいまち東京を復活させる<sup>3)</sup>」で、公園や庭園を活かした「まちの顔づくり」の取り組みに基づいて『まち』を定義した。また「社会の構成員誰もが仲間になって多様な支援を創ること<sup>4)</sup>」である地域社会を目指し、「練馬区民が住み続けたいと思える美しい地域環境、豊かな地域社会を実現する<sup>5)</sup>」ための行政、住民、事業者が協働で行う活動を『まちづくり』と定義する。「花くらぶ」は、地域活動支援センターにおける、「きらら」の生活を豊かにすることを目的としたプログラムであり、園芸療法と照らし合わせたものではない。しかしながら植物を扱い、育てるという点において、園芸プログラムモデル「花くらぶ」と名称を使用している。6年間の活動の中で試行錯誤を重ねて今日の形になり、当事者、ボランティア、まちにとって双方向の支援につながっていると私達は考えている。以上を踏まえ、活動の現状をまとめ、次へのステップアップのために課題を抽出していきたいと考える。

### 2. 「花くらぶ」の実践の背景

「きらら」は、社会福祉法人練馬区社会福祉協議会に練馬区より運営を委託され、2003年12月に開設した。その基盤になる精神障害者地域生活支援センターは1999年の「精神保健福祉法」の改正により、精神障害者社会復帰施設の一つとして法定化され、2005年障害者自立支援法により市町村

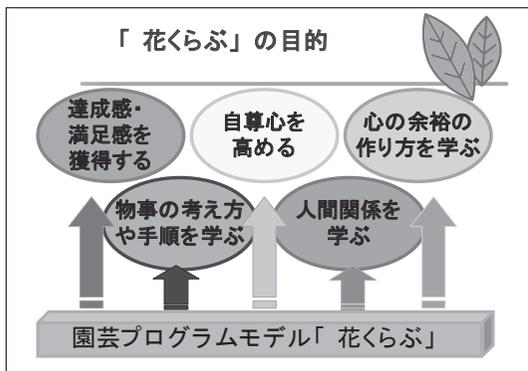
の地域生活支援事業である「相談支援事業」と「地域活動支援センター事業」などに再編された。1996年には全国22カ所に過ぎなかったが、2005年には472カ所に急増になり、その設置主体の内訳は社会福祉法人168カ所、医療法人155カ所、市町村87カ所で、運営主体の内訳から社会福祉法人立が増加していることは、地域生活支援センターの公益性の高さを示し、生活ニーズに合わせた地域生活実践に寄与したといえる。<sup>6)</sup>「きらら」は開設以来、主に精神の病を持つ人たちやその家族が地域で孤立せず、安心して自分らしく生き生きとした生活が送れるように一緒に考え、病気によって生活の工夫や生活の豊かさを追求する機会を削がれている精神の病を持つ人たちやその家族の支援を行っている。そして「花くらぶ」は「きらら」のベランダの花の手入れから始まった。現在は、平成つつじ公園、練馬区役所西庁舎10階のユニバーサル花壇、練馬公民館・図書館前、駅からはじまる花いっぱい事業、豊玉すこやかセンター前、練馬駅中央通り商店街、練馬デイサービスセンターと合計7カ所の活動拠点がある。

### 3. 「花くらぶ」の実践

#### (1) 「花くらぶ」の目的

##### ① 当事者の自尊心を高める

枠組みを持って他者との時間を共有すること、また、人の役に立つことが、目に見えてわかりやすい地域社会の活動への参加は帰属感・所属感となる。できることを増やし、自身の健康な面を伸ばすとともにそのことに気



づくきっかけを提供する。自信回復のきっかけとする。

##### ② 達成感・満足感を獲得する

花壇がきれいになる、花が咲く、育つなど必ず結果が出る達成感とその場で他者とともに、同じように感動できる満足感を得る機会とする。

##### ③ 心の余裕の作り方を知る

花の名前を覚えることや、植物を通じて生かされていることを実感する。元気だったときの自分の力を発揮する。時間を区切り、場所を変えろというプログラムの構成から気分転換を知る機会とする。

##### ④ 物事の考え方や手順を学ぶ

優先事項を考える。今、何を優先すべきか。プログラムの中でできることと、無理なことの見極めを具体的に挙げる。今日やることを季節と天気と相談して、より効果的な手順を学ぶ。

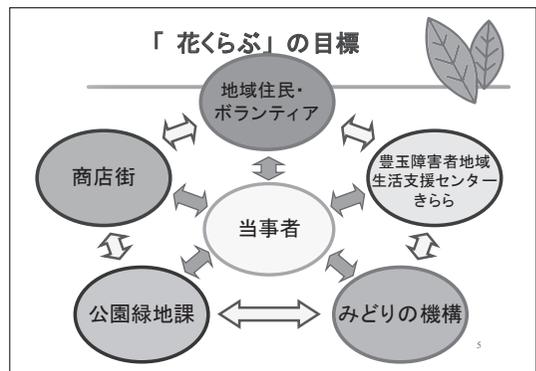
##### ⑤ 人間関係を学ぶ

「花を媒体とした共同作業により、花を大事にして素敵な花壇作りをしましょう！」と明確な共通目標設定のもと、緩やかな安心した人間関係作りを学び、互いを尊重し安定した生活を目指す。そして、スタッフを知り「きらら」という場を知り、安心して相談できる関係を作ることを学ぶ。

#### (2) 「花くらぶ」の目標

##### ① フラットな関係性を築く

活動は、強制的に行われるものではなく、



自己選択である。また、活動においては、当事者、スタッフ、ボランティアと同等である。

## ② 地域住民とともに行う

地域住民であるボランティアとの緩やかな人間関係の中でまちづくりという社会参加を行い、地域に暮らしているという感覚を実感する。

## ③ 気に「なる」「かける」ことを学ぶ

植物の世話を通じて気に「なる」「かける」ということの心地よさを体感し、他者と共有する。他者との人間関係を構築するための自信につなげる。

# (3) 「花くらぶ」活動を行う順序

## ① 参加

本人または家族の希望や、担当ケースワーカーによる紹介からスタートする。「きらら」を利用する際に登録面接で本人へのアセスメントを行っている。参加条件はなく、見学のみでも、途中参加も、退出も有り、「とにかく一緒に花壇へ行こう！」という気持ちを大事にしている。定期的に行われるプログラムの設定は、当事者にわかりやすく、初めての人でも参加しやすい。なお当初は月2回だったが、当事者の要望により毎週となった。年に数回外出もあり、季節の花をともに楽しむ企画も行っている。

## ② 個別の目標設定

参加目的・目標を個別に「花くらぶ」の目

的に沿って、事前に設定する。

## ③ 計画・実施

協働で行っている「みどりの機構」とともに「花くらぶ」の計画内容を組み立てる。年度末には次年度の年間計画も立て、長期的な考え方を目指す。活動に入る前に、全員でミーティングを行い、本日の活動内容（予めスタッフが提示する）、活動内容（どこの花壇に行きたいか、花の購入、花壇整備等）を決めて、各自確認を行う。同時にスタッフは当事者の表情、口調、行動から体調などを把握し、天気や気温をかんがみて無理のないよう内容を組み立てる。当事者には来所時の受付やオープンスペースなどで声かけを事前に行い、参加しやすい安心した雰囲気を作る。

## ④ 自己評価

活動後は、当事者・ボランティア・スタッフの皆でお茶を飲みながら、休息をとりつつ、各花壇活動の報告と感想を述べ、次回の予定を確認している。

## ⑤ 当事者の観察と記録

プログラムに関わったスタッフだけでなく、その場にいるスタッフで、他のプログラムでの様子など、当事者の情報の共有化をはかっている。表情、気分、身なり、最近どう過ごしていたか、こだわり、作業の様子、会話や他者との交流、今何に興味を持っているか等、当事者を観察した事項を報告し合う。

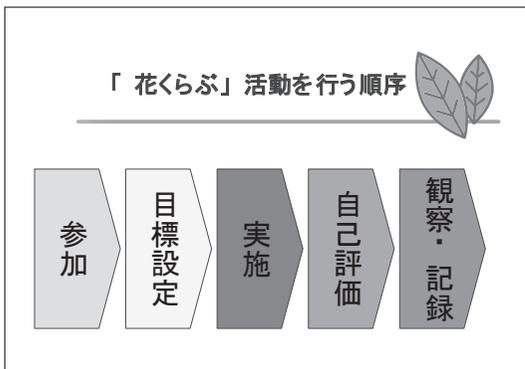
また、植え替え花壇や、作成物等、当事者の様子も写真等記録に残している。

# (4) 「花くらぶ」の支援結果

先行研究の田崎<sup>7)</sup>の園芸療法の研究データ項目に照らし合わせると、次のような傾向が見られた。

## ① 社会参加を通して広がる行動範囲と安心感

花壇が拠点となり、活動のない日でも当事者・ボランティアがふらっと立ち寄れる・気にかけることができる場所となった。行動範囲も広がり、「花くらぶ」の外出では3年ぶ



りに山手線に乗れたという人もいて、自身の行動範囲が広がるきっかけづくりになっている。活動中に地域の方より、感謝の言葉かけがあり一層社会参加の意義を感じる。

## ② 自己実現の広がり

満足感・達成感の体験を通じて体力がついた人は就労に結びついた。

園芸作業で「植物を育てる」という行程が完了し、花が咲いたり、またクラフトなどで作品ができた時、田崎<sup>7)</sup>は満足感や達成感が得られると同時に生活行動にも自信がつき、それが自尊心につながると言っている。

## ③ 気分転換・ストレス発散

活動に参加した当事者は、花に興味を持ち、自宅で家庭菜園を始めた人、花を見るバスツアーに参加した人、花を写真で撮り、絵はがきを作成しイベントで販売するなど各々様々な発展している。「花くらぶ」は約2時間で、皆で歩いたり、土を運んだり汗もかき、風にあたり、たまには雨にも降られ、休憩しながらの作業のため適度な疲労感と爽快感につながっている。田崎<sup>7)</sup>の報告より適度の疲労感と爽快感は睡眠状態もよくなるとのことから、「花くらぶ」は、生活リズム作りの要素もある。

## ④ 長期的な思考力

季節を感じる力がついてきて、年間計画を立てるまでに至ってきた。継続的に参加することによって花の水遣りは大丈夫かな、雨降って良かったかなと成長過程を長いスパンで観察している。

## ⑤ 人間関係性の広がり

実習生、ボランティアの方々と一緒に活動する「花くらぶ」は、教わる、教える、聞く、質問する、というコミュニケーションの中で、他者への尊敬・尊重を学び、実践している。オープンスペースでの会話の様に人と人が向き合って話をするのが苦手な人も、作業を通じての「ながら話」なら自然と体とともに口も動く。継続的なボランティアの方々の関

わりに、当事者は理解をしてもらっている、受け入れられているという安心感があり、フレンドシップもできている。植物の成長を当事者、ボランティア、スタッフと一体となり心をわかちあうことができる関係ができた。

## (5) 「花くらぶ」の想定外の効果

### ① 自己表現の拡大

花壇作りや収穫した花でのしおり作り・絵はがきは、自分のイメージや気持ちの表現、思考をまとめていく作業につながって感性や創造性を高めている。田崎<sup>7)</sup>は出来上がりを考えながら配植したり、将来の庭の様子を想像することが感性や創造性を高めると言っている。更に季節のイベントに参加が恒例になってきて、出店が楽しみのひとつになっている。

### ② 視野・関心の拡大

知らなかったことを知るといきいきする。「あ～そうなんだ」と今まで気づかなかったことにも視線がいくようになる。更に園芸には、いろいろなやり方が有り、正解はないことを知った。

### ③ ボランティアの理解の拡大

「花くらぶ」のボランティアの人達は、「当事者が元気になるにはどういった楽しいことをしたらいいか」ということを共に考えている。練馬いきいき体操はどうかと提案を頂き、「きらら」ではプログラム化し、更に料理教室のプログラム化までに発展していった。地域住民であるボランティアの人達の、活動の場にもなっている。

## 4. おわりに

結果そして想定外の効果は実践の中で自ら体験したものであるが、客観的な調査方法を持ち、分析出来たことではない。これからは今までの実践を深めて客観性をもった実践として作って行くのが課題として残されている。活動評価については、活動後随時スタッフルームの中で打合・報告

を行っている。しかし口頭で行われているため、記録も不十分でスタッフの頭の中の経験知にとどまっている。そこで「記述式の実施記録表・スコアによる評価表」（参加者の病名・年代・性別等も含む）を作成、言語化することで実践を振り返り、現状と課題を分析し実践をステップアップすることが重要と考える。そして「花くらぶ」の活動を通じて、人と関わることへの心地よさ・喜びを、安心した空間の中で経験し、自分らしい目標設定のきっかけとなる場であり続けたい。「花くらぶ」の活動を福祉という小さな枠組の中にとどめず、「花のちから」で心豊かになる「花くらぶ」を通して当事者、ボランティアの力を埋もれさせることなく、生かして今後もまちの中からマッチングしていくものを探り続け、まちのパートナーとして、提案し、協力し地域づくり活動を目指したい。

#### 参考文献

- 1) 東京都保健福祉局：「緑の東京10年プロジェクト」<http://www.kannko.metro.tokyo.jp/nature/attachemnt/2011fact/pdf>
- 2) 一般財団法人練馬みどりの機構：福祉連携緑化事業 <http://www.nerimamidorinokiko.org/project/hukushi.html>
- 3) 東京都知事本局計画調整部計画調整課：「10年後の東京」 [http://www.chiji.metro.tokyo.jp.plan2011pdf/gaiyo/plan2011pr\\_2.pdf](http://www.chiji.metro.tokyo.jp.plan2011pdf/gaiyo/plan2011pr_2.pdf)
- 4) 寺谷隆子、精神障害者の「自立生活」を考える、社会福祉研究、vol109、38-44（2011）
- 5) 財団法人練馬区都市整備公社2006-2010：練馬まちづくりセンター、センターの理念 <http://www.nerimachi.jp/about/ideal.php>
- 6) 栄セツコ、精神障害者の地域生活支援「障害者自立支援法施行に伴う精神障害者地域生活支援センターの移行に関する一考察」 桃山学院大学総合研究所紀要 34(1)、57-71（2008）
- 7) 田崎史江、園芸療法、バイオメカニズム学会誌、vol30、No.2: 59-62（2006）

## 若年認知症者の地域自立生活支援におけるソーシャルサポートのあり方に関する研究

博士後期課程1年／学部2006年卒 田中 悠美子

### I. 問題の所在と研究目的

若年性認知症は、若年期認知症（18歳～39歳に発症した認知症疾患の総称）と初老期認知症（40歳～64歳に発症した認知症疾患の総称）の両者を含んだ名称としている。厚生労働省の調査<sup>ii</sup>では、推計で全国に約3万8000人、推定発症年齢の平均は51.3±9.8歳（男性51.1±9.8歳、女性51.6±9.6歳）と発表された。

若年性認知症という名称が注目される背景には、老年性認知症者とは異なる社会生活上の問題を持つと考えられる。それは、①失業やローン返済、教育費などもあり生計維持が困難になること、②病気の受容に対する抵抗感があること、③周囲の理解や医療・福祉サービスにおける社会的な評価がされていないこと、④相談するためのアクセシビリティの問題があること、4点に整理できる。そこで本研究は、これらの問題を解決するために医療やケアの専門職のあり方やアプローチ方法に着目したいと考えた。特に、地域福祉の考え方が主流になっている今日において、在宅サービスを展開していく上で重要な鍵といわれているソーシャルサポート・ネットワークに焦点を当てたい。

そこで本研究の目的は、若年性認知症者や家族に対して、どのようなソーシャルワーク理論を用いて支援をしていくのか、ソーシャルサポートを鍵概念にした理論仮説の生成について検討を行うこととした。

### II. 研究方法

研究方法は、文献調査と聞き取り調査を行う。

- 
- i 宮永和夫：I. 疫学、『若年認知症の臨床』新興医学、東京、37-39、(2007)。
  - ii 朝田隆：若年性認知症の実態と対応の基盤整備に関する研究、厚生労働省（2009）。